

淀川産の天然ウナギと大阪湾産マガキが食べられる日は



基調講演で
熱演の畠山氏

「今、関西空港の人工島周辺は魚介類の豊かな場所になっている。採捕禁止にもかかわらず釣り人が後を絶たない。大阪湾に埋立地はあまたあるが、このように豊かな場所は他にない。人工島の基盤には、利用されなくなった鉄鉱石が大量に埋められていて、そこから溶け出した鉄分が起因している。」シンポジウムの終盤、畠山氏はこう指摘した。

淀川河口にウナギ漁師がいる。年間200kg1000匹ものウナギを漁獲する。このウナギ漁に同船した畠山氏の大阪湾の見方が変わった。どす黒く汚れた死の海といった認識を近年見直したということだ。「自然とかけ離れているような淀川や大阪湾は、思っている以上に自然度が高いのではないか」。淀川水系は、ウナギの生育に適した水系だという。

大阪湾はかつて豊饒の海だった。その海を再生し、淀川水系全域に天然ウナギを復活させる。大阪府民、特に中・北部に住む者にとって、大阪湾の漁業は縁遠い話題だが、都市住民が気軽に海辺に出かけることができる仕組みづくりが大切だ。こうしたことに、ウナギや、マガキ、シジミといった魚介類がキーワードになる。そして、田中氏が推進する森里海連環学、そのキーワード「つながり」。そうしたことに思いを寄せ、気付かされた、価値あるシンポジウムであった。

以下、紙面の都合上、話題提供の講演に限定し紹介します。

淀川の天然ウナギ(津田氏) 大阪府高槻市では「ウナギの森植樹祭」が毎年開催されている。津田氏が主催し今年で5回目になる。畠山氏が主催する「森は海の恋人植樹祭」は漁師が山に木を植える活動だが、こちらは山主(宮崎県に広い社有林を所有する林業者＝津田産業)が海のために植林するというユニークな活動だ。淀川にそそぐ高槻の川の源流域に植林し、水系のウナギを増やそうという狙いでこうした名前がついている。(自然と仲間 2016年6月号に第4回「ウナギの森植樹祭」として取材報告)

大阪湾産のマガキ(矢持氏) 大阪湾でカキ養殖を産業化しようと実験的生産が行われている。生育は極めてよく、カキの成長は一般的な養殖の倍の速さで成長し、出荷できることが実証された。また、コスト的にも産業として成り立つ素地があるとの報告があった。大阪府は西側がすべて海であるにもかかわらず、府民・市民の足は遠く離れている。「食を起爆剤にして市民を海岸に誘導する施策が肝要だ」。

イカナゴは深刻(大美氏) 大阪府でも春の風物詩のイカナゴの釘煮。その漁獲量が深刻な状態だ。イカナゴは、北方系の魚で夏の高水温を避け夏眠を行うユニークな魚。未成魚の状態に砂に潜り、半年もの休眠中に成熟していく。その海砂が建築材として採取され、夏眠場所は打撃を受けた。海砂採禁止海域が設定されたが、それでも近年極度の不漁が起こっている。海水温の上昇によるものだ。夏眠場の水温上昇により、死ぬ個体、成熟できない個体が出てくる。成熟しても卵数の減少が起こる。海水温の変化、栄養塩濃度の変化、夏季の低層の貧酸素化、埋め立てによる浅場の減少など、様々な要因が複合的に作用している。イカナゴは、人間生活の影響を受け続けてきた魚で、森里海連環学が説く「つながり」が重要だ。

大阪湾は豊穡の海(北川氏) かつては、豊かで恵み多い大阪湾。魚介類は鮮度もよく他所より高値で取引されていた。が、高度経済成長の中で不評・悪評、悪いイメージが広がった。現在、水質は改善したが、海底の回復は遅れていて、底ものといわれる魚介類は獲れない。世界の魚の需要が大きくなる中で、増殖・養殖・蓄養が必要だ。法律や規制の見直し、特区制度など活用し新しい生産拡大に取り組んでいく。漁業者だけで漁業を考えるのではなく、消費者と一緒に考えることが重要。

最後に、日下部氏から紹介のあった、ある小学生の「チリメンモンスターさがし」の感想を掲載します。

「今日の大阪わんについてビデオを見た。そして、じゃこをわけた。ぼくはイカやタコをとった。ぼくは大阪わんについて思った。みんながもっときれいにあつかえば海でおよげてもかもしれない。だからぼくは思った。そこらじゅうにゴミをすてなければよかった。これから海をもっときれいにしたい。じゃこの勉強をしてすごく楽しかった。」

(広報 芳澤)



日下部氏は「チリメンモンスターさがし」の生みの親

開催日時: 2017年11月23日(木) 13時~17時

開催場所: 大阪産業創造館 4F イベントホール

主催: 一般社団法人全国日本学士会

認定NPO法人シニア自然大学校

趣旨説明 田中 克

京都大学名誉教授・舞根森里海研究所所長

基調講演 畠山 重篤

NPO法人森は海の恋人理事長・漁師・エッセ

イストなど

パネル討論

コーディネーター 日下部 敬之

大阪府環境農林水産総合研究所水産研究部長

話題提供 北村 英一郎 大阪市漁業協同組合長

話題提供 大美 博昭

大阪府環境農林水産総合研究所

水産研究部主任研究員

話題提供 矢持 進 大阪市立大学名誉教授

話題提供 津田 潮 津田産業株式会社社長

(配布資料より)



パネルの皆さん 左より、田中 克、畠山 重篤、北村 英一郎、大美 博昭、矢持 進、津田 潮(敬称略)